



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第33号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合; Digital Repository Federation
Description	事務局: 北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2012-10-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73580
Type	journal
File Information	DRFmonthly_33.pdf





月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第33号

No. 33 October, 2012

【特集1】平成24年度 第2回 機関リポジトリ新任担当者研修レポート

【特集2】rliasionワークショップ「Do aim too much! (欲張って行こう!)」

【特集3】DRF地域ワークショップ (近畿地区)

<トピックス> Finch Report

【特集1】平成24年度 第2回 機関リポジトリ新任担当者研修レポート

平成24年9月6～7日に岡山大学附属図書館新館1階AV演習室にて、平成24年度第2回機関リポジトリ新任担当者研修を開催しました。今回のレポートでは、受講者の声と講師陣から次回受講者へのメッセージをお届けします！

※講義内容については、月刊DRF32号や、前年度の資料 (<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?Events#cbda0357>) をご覧ください。

「オープンアクセスと機関リポジトリの概要」



三根慎二
(三重大学)

☺先生方とお話できるよう、研究について調べる事が重要だということがわかり、よかったです。

今回で私の担当は終わりです。逸村先生のご講演に期待して下さい。

「機関リポジトリの構築」

鈴木恵津子
(東京家政大学)



☺機関リポジトリそのものが何なのかが、あやふやだったものが少しくクリアになりました。ありがとうございました。

明確な計画を立てて、リポジトリをみんなで大きくしていきたいと思います。

「広報・コンテンツ収集」



永井一樹
(兵庫教育大学)

☺広報グッズなど、他大学の取組状況がわかっておもしろかったです。

研修でモチベーションに火をつけて、直後のOAWに延焼しましょう。(オレンジの炎!) あと、懇親会用に名刺をお忘れなく。

「事例紹介・模擬プレゼン」

山田智美(岡山大学)・濱知美(広島大学)



☺登録義務化の話が興味深かった。模擬プレゼンは2日目のグループ討議の参考になった。

ご近所付き合いからでも結構です。この研修で習得したことを、自機関だけでなく他機関の方々とも共有してください。

「著作権概論・実習」



兵頭尚恵(神戸大学)

☺スライドの美しさに感動しました! もやもやしていたところがクリアになった気がします。

事前課題は難しい問題もあるかと思いますが、自分が著者になったつもりでポリシーを眺めてみてください。

事前登録されたメタデータをチェック、みなさん基本をしっかりと理解されているなど感心。次は講師をぜひ。

「メタデータ概論」

☺用語集が嬉しかったです。専門用語になれていないので、とても助かりました。

メタデータ概論はリポジトリの相互運用性を考える上で大切な知識です。専門用語が多く分りにくい部分もあると思うので、事前に[昨年度の講義資料](#)を眺めて雰囲気をつかんでおくとういと思います。



大園隼彦
(岡山大学)

「コンテンツ登録実習」

☺実際に作業できるのは良かった。職場では自システムでアクセスしてみようと思った。

森保信吾
(広島工業大学)



「グループ討議・発表」

☺いろいろな作り方、見せ方、説明のし方がありおもしろかった。

機関リポジトリについて、いかに分かりやすく説明できるかがポイントになります。1日半にわたる講義内容を、わずか5分の中にまとめることは、とてもハードルが高いと思いますが、みなさんの腕の見せ所でもあります。事前課題を含め、頑張って挑戦してみてください。
担当：大園岳雄(香川大学)



「機関リポジトリの公開」



高橋菜奈子
(NII)

☺CiNiiとの連携部分など、自館で確認すべきポイントがみえました。

登録したコンテンツは使ってもらえることが大切! データがどこに流れ、そのときどんなことに気を付けないといけないか考えてみてください。

【特集2】rliasionワークショップ 「Do aim too much!」（欲張って行こう!）

9月11日、DRF rliasionプロジェクト主催のワークショップ「Do aim too much!（欲張って行こう!）」が、共催の東京歯科大学を会場に開催されました。rliasionプロジェクトでは、学術雑誌論文公開促進のふたつのアプローチである、積極的な著作論文の登録を働きかける「意識喚起」と、著作論文を必ず登録するよう義務づける等の「制度構築」について、調査と実践に取り組んでいます。いわゆる「アメ」と「ムチ」は具体的にどのように実践されているのか？ワークショップの様態をレポートします。

セッション1 もうお願いはしない：アドボカシーからマンドートへ



▲土屋俊 ▲鈴木雅子 ▲富田健市 ▲杉田茂樹

セッション1では、土屋俊氏（DRFアドバイザー/大学評価・学位授与機構）を座長とし、機関リポジトリのマンドート＝登録の義務化を巡る動きについて、氏の基調トークの後、鈴木雅子氏（DRF/旭川医科大学）富田健市氏（岡山大学）、杉田茂樹氏（DRF/小樽商科大学）からそれぞれ報告がなされました。

土屋氏は、結論はマンドート（だけを）しろと言わないことだ、と述べ、研究者の説得には、ただ制度を確立しても意味がなく、研究者の自覚を促す＝アドボカシーを維持し、その協力獲得のために、DRFが2010年のBerlin8で提言した「Hita-hita」路線（助成団体や研究機関のOA方針等に依存しない、リポジトリマネージャの連帯的尽力に根差すグリーンOA。参考：[月刊DRF第9号](#)）を継続すべきと説明しました。

鈴木氏は、rliasionプロジェクトの概況報告として、国内の5つの大学における制度構築の事例について報告しました。学内の反対にあいアドボカシー強化に切り替えた例がある一方、お願いはしなくてもコンテンツが集まるような制度を構築し、順調に推進している例、また、論文の抜刷・APC等の支払いや、科研説明会を活用してコンテンツ収集のルート構築を促進している事例を紹介しました。

富田氏から、博士論文の登録義務化一年目である岡山大学の現状についての報告がありました。まず、義務化の決定が昨年度の12月だったため、登録許諾確認書を任意提出にせざるを得なかったこと、そのため、学位論文について100%提出された研究科もあったものの、全体としての提出率は25%にとどまり、提出論文全てを公開するには至らなかったことなどが報告されました。今年度は義務化を周知徹底し、確認書を原則として全員提出すること、各研究科教務担当者と連携強化を図ることを目標としたいと述べられました。

杉田氏は、成功しているベルギーのリエージュ大学リポジトリ「ORBi」のリエージュモデルについて報告しました。このモデルの考え方は、機関リポジトリは網羅的だからこそ意味があり、そのための制度は断固且つソフトであるべきだということです。単に研究評価における公式文書とみなすことが、結果的に登録義務化に相当する効果を生む点と、著者名別表示可能な形でリポジトリ一般公開されたり、大学構成員名簿から直接ORBiにリンクされるといったメリットも同時に提供している点が重要であると説明されました。

セッション2 こんにちは、図書館です

セッション2では、竹内比呂也氏（DRFアドバイザー/千葉大学）を座長とし、アドボカシー活動により、図書館が学内外とのつながりを強化することでリポジトリの発展を促進する事例について、氏の基調トークに続き、菊池美紀氏（DRF/聖学院大学）、城恭子氏（DRF/北海道大学）、浅野泉氏（旭川医科大学）、南絵里子氏（DRF/小樽商科大学）、和田崇氏（DRF/奈良県立医科大学）から報告がなされました。



▲竹内比呂也 ▲菊池美紀 ▲城恭子 ▲浅野泉 ▲南絵里子 ▲和田崇

竹内氏からは、教員と図書館員が協働する取り組みであるリエゾン・ライブラリアン・プロジェクトについて紹介がありました。「授業資料ナビゲータ」（パスファインダー）を教員と図書館員の間でやり取りしながら作成するなどの活動を通して教員に「図書館の〇〇さん」と認識してもらい、密接な関係を保つことによって、リポジトリの活性化はもちろん、学内の様々な場面で教員からの協力を得やすくなることが述べられました。

菊池氏からは、図書館のカウンターを中心にした広報活動について、カウンターを訪れる教員に声掛けをし、リポジトリへの登録を説明、依頼しているとの報告がありました。「全ての図書館活動の最前線」としてリポジトリを位置づけ、大学全体の活動として他部署と連携し、共に構築する姿勢で臨んでいることが発表されました。

城氏からは、研究室訪問や教員インタビューへの取り組みを継続して推進することを目的に、「いいとも作戦！」（インタビューした教員に次に訪問する教員を紹介してもらう）や、リポジトリ以外の係が教員インタビューを行う際に「相乗り」をおこなっているとの紹介がありました。このように学内でリポジトリへの理解者を増やそうと努めていることが報告されました。

浅野氏からは、教員中心の委員会とは別に、大学の広報係や研究協力係、大学院係、情報基盤センターなど、学内各課の職員と図書館職員で構成される「推進支援室」が設置されていることが紹介されました。大学全体で活動する体制であること、研究室訪問にあたって研究協力係職員に仲介・同行してもらうことができ、うまくいったこと等が報告されました。

南氏からは、専属司書制と学年担任司書制についての発表がありました。専属司書制は、1人の教員に対し2人の図書館員を担当としてつけ、リポジトリだけでなく図書館についての問い合わせは必ずその担当者を通すことで、教員と図書館員のつながりを深めるもので、学年担任司書制は、各卒業予定年次生と大学院生を図書館員で分担して受け持ち、入学時から卒業時まで担当するもので、新入生オリエンテーションや、大学行事への同行により、学生との距離を近づけるよう取り組んでいると報告されました。

和田氏からは、はじめての教室訪問を通じて、教員にアプローチすることにより、リポジトリへの好反応が直接伺えて自信につながったこと、また別の文献の登録の際に行った著作権処理で、その権利者とのやり取りが長期化し、一時は頓挫しそうになったもののアプローチしつづけたら結果的に成功したことなどが報告され、自ら動いてアプローチしていくことの重要性が述べられました。

●当日の司会および発表をされた南氏からのコメント

セッション1については、実際に義務化を進めている岡山大学の事例報告が参考になった。マンドートを進めるにも、研究者にIRの意義を理解させるのが肝要であり、「義務化」と「意識喚起」は独立してではなく、補完し合って進めていく、「Hita-hita」路線が結局有効なのではないかと感じた。セッション2については、さまざまなアドボカシー活動に共通して言えることは、図書館職員が動かなくては何も始まらないということ。IR活動を支えるのは図書館職員の地道な努力であることを実感した。ただ自分たちの役割について常に考えていく必要性も感じた。



【特集3】DRF地域ワークショップ（近畿地区）

9月21日、神戸松蔭女子学院大学にて、DRF 地域ワークショップ（近畿地区）：DRF-Kinkiを開催しました。講演あり、事例報告あり、分科会ありと大変盛りだくさんのプログラム内容で、参加者の方にも満足していただけたようです。

そんな盛況だったワークショップの模様を、参加者の声を交えてレポートします。

※講演や発表で使用された資料は、<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRF-Kinki> に掲載予定です。

講演1：「オープンアクセスと機関リポジトリ」時実象一（愛知大学）

第一の講演では日本だけでなく、イギリスやアメリカ、ドイツ、フランスなど各国での事例を交えながら、オープンアクセスと機関リポジトリの歴史、そして現況についての講演が行われました。「オープンアクセス」という言葉の定義から始まった本講演は、

- オープンアクセスの歴史・動向
- Budapest Open Access Initiative：BOAIについて
- オープンアクセスジャーナルについて
- 機関リポジトリ・分野別リポジトリ・研究助成機関リポジトリについて
- 機関リポジトリと出版社の関係

など聴きどころ満載の内容で、参加者からは「もっと時間を！」という声も聞かれました。

☺オープンアクセスとリポジトリについて、海外の事例を含め幅広く現状を知ることができ良かったと思います。

☺OAと出版社とのバトル、闘い合いが興味深かった。

☺外国は義務化など、日本に比べて進んでいることがわかった。日本が今後外国に続く形になるのか気になった。



講演2：「どうする？機関リポジトリ-中小私立大学から見て」 槻本正行（神戸松蔭女子学院大学）

続いての講演では、中小私立大学における機関リポジトリの在り方についてを中心に、機関リポジトリを広報戦略の一つとして捉えて展開していく必要性について、講演が行われました。日本の機関リポジトリの多くは国立大学と大規模私立大学によって立ち上げられており、中小私立大学は大学数に比べ、リポジトリ設置数が非常に少ないというのが現状です。しかし、そのような中小規模の大学がこれから頑張っていかなければならないのだ、と熱く語っていただきました。参加者からも「先生の熱意が伝わる」と大変好評でした。



- ☺「リポジトリを広報戦略にしていけるべき」というお話にとっても共感しました。大学としてもそうですが図書館としてもアピールが必要です。（図書館は他部署からは蚊帳の外な感じがありますので）
- ☺やる気でした。スライドはぜひDRFのHPIにのせてください。

事例報告：大阪青山大学と神戸松蔭女子学院大学の事例



大きい大学にはないメリットや苦労点を紹介されました。どちらの大学も「近畿における機関リポジトリコミュニティ形成の支援研修会」に参加されていたのが印象的でした。

- ☺小規模大学のメリットを生かして構築されたこと素晴らしいと思います。
- ☺職員さん全員で作られたんだということがよくわかりました。「研究成果がなくても教育成果を！」の視点がすばらしいと思いました。



▲佐藤浩輔（大阪青山大学）

加川みどり（神戸松蔭女子学院大学）▲

分科会：4つのテーマに分かれて 参加者が4つのテーマに分かれ、それぞれテーマに沿った討論・協議・発表を行いました。□□は発表の簡単なまとめです。

1. 「CiNii と IR、どう違うのか

－機関リポジトリを運営しそこに載せることの意味－

CiNiiには学術雑誌掲載論文の登録はできない。対して、機関リポジトリは学術雑誌掲載論文の登録が可能であり、これは、現在の出版社優位の学術流通を研究者主体とする活動につながるのです！

☺難しかったです。本学なりの意味づけができるような内容を検討すべきかと思います。

☺アクセスログがIRの強いメリットと感じたので、勉強します！

3. 「システム選択

－NII共用リポジトリか自機関独立サーバか－

リポジトリシステムの選び方は

- ◎自己資金の有無
 - ◎情熱や熱意の有無
 - ◎システム系技術者の有無・・・
- などの条件に左右される。リポジトリでやりたいことは何かを明確にする必要あり。

☺少人数で悩みを共有し、解決できました。他館様の状況を教えていただき良かったです。

☺JAIRO Cloudに決めているが、不安な点も含めて大変参考になりました。

2. 「メタデータ登録の実際

－コンテンツごとに異なるメタデータ－

コンテンツタイプや学問分野によって特徴的なメタデータがあるが、現在のメタデータ基準“junii2”は対応が不十分である。しかし、今から入力しておけば将来のより効率的な検索に貢献できるであろう。

☺メタデータのチェック体制の話など有意義なお話が聞けました。

同じ悩みを共有する者同士、話が盛り上がります。

4. 「公開前後

－サービスプロバイダ登録など諸々－

公開前後に行うべきことは以下の通り。

- ◎学内への広報（お披露目会や記念インタビュー等）
- ◎学外への広報（サービス・プロバイダへの登録等）
- ◎リポジトリデータのバックアップ
- ◎利用実態の把握（アクセスログ解析等）

☺少人数でしたので、色々うかがえてありがたかったです。

少人数で膝を突き合わせて話し合うことにより、色々な話が聞けました。



地域ワークショップは、近くにいる仲間と知り合ういい機会ね。参加者の皆さんにはこのワークショップを通じて、コミュニティの輪を広げていってほしいと思うわ。

【トピックス】 Finch Report

2012年6月、「Finch Report」(フィンチレポート)という報告書が英国政府に提出されました。これは英国のDame Janet Finchがリーダーをつとめる、研究成果へのアクセス性拡大のための作業部会によるものです。研究成果を流通させるいくつかの方法の中でも特に、ゴールド路線※によるオープンアクセス(以下OA)で出版改革することを推奨しています。Finch Reportについて、Dr.Fに詳しく聞いてみましょう。

※ゴールド路線…購読料を読者が負担しないOAジャーナルを刊行することでOAを実現する方法。これに対し、著者が論文を機関リポジトリ等にセルフアーカイブする方法をグリーン路線といいます。この2つの方法は、2002年にブダペストオープンアクセス運動(BOAI)で宣言、提唱されました。



▲Dr.F

Q.Finch Reportって、そもそもどうして出されたの？

A. Finch Reportとは、英国政府の諮問を受け、Research Information Network(以下RIN)が答申したものじゃ。RINの検討部会のリーダーの名前をとってこのように通称されておる。学術雑誌の価格高騰に伴い購読タイトル数が減少する、といういわゆる雑誌危機(the Serials Crisis)は、電子ジャーナルの大量包括購読契約の普及で解決された。

じゃが、雑誌の価格上昇自体が止まったわけではなく、大学図書館の雑誌購読経費は増大しつづけておる。議論はずっと続いておるのじゃが、Finch Reportは今回、公的資金に依る研究成果は、Article Processing Charge(掲載のための論文処理料金。以下APC)を資金とするフルOA誌、もしくはハイブリッド雑誌(一部がOAである雑誌)に発表されるべきと推奨しておる。

Q.なんでゴールドOAを推奨しているの？

A. ゴールドOAはAPCのかたちで著者に課金し、出版後すぐに誰もが自由にアクセスできるようにする方法じゃ。読者にとっては、査読され、豊富な情報が付された論文を即時に、無料で利用できる、著者にしてみれば、論文をどの雑誌にどのように掲載するかを、コストとサービスの品質を天秤にかけて決定できるというわけじゃな。Finch Reportによると、雑誌の質と価格の競争が効果的に働くことにつながり、ひいては学術雑誌市場の透明性を高めるとも説明されておる。

Finch Reportは、ゴールドOAの主な障壁がAPC支出についての社会的・資金的な裏付けがないことだとみなしており、それを設計、提唱しようと試みておる。関連情報として、英国政府が1000万ポンドをAPC用として、通常の資金以外に配分すると発表したことも参考にするといよいぞ。

(コラム1参照)最終的には、競争すべきところとそうでないところを整理して、研究成果を社会における共通資本として維持するための制度作りが期待されるところじゃな。

Q.じゃあ、リポジトリはもういらないの？

A. Finch Reportは、修士論文や博士論文、研究データ、ワーキング・ペーパーやその他の灰色文献を含む研究成果にアクセスする手段としてのリポジトリの基盤を発展させるべきと言っておる。

じゃが、これは機関リポジトリの役割を、単なる灰色文献の保管庫に矮小化せしめようとしているわけで、到底許容できる考え方ではないとワシは思うぞ。ワシに言わせれば、機関リポジトリは余分な費用がかからず、誰もが無料アクセス可能であるなど、ゴールド路線にはない利点を多く持っておる。また、「Houghton Report」(ホートンレポート。コラム2参照)では、むしろグリーン路線をメインにしたOAが提唱されておる。OA促進のためには、機関リポジトリをはじめとしたグリーン路線からのアプローチも、もちろん不可欠じゃとワシは考えておるぞ。

参照：

- Finch Report(最終版) <http://www.researchinfonet.org/wp-content/uploads/2012/06/Finch-Group-report-FINAL-VERSION.pdf>
- Research Information Network ウェブサイト <http://www.researchinfonet.org/publish/finch/>
- Nature掲載記事Open access: Let's go for gold Michael Jubb (Research Information Network, London, UK.) Nature 487, 302 (19 July 2012) doi:10.1038/487302a Published online 18 July 2012

コラム1：大学のOA化促進に向けた英国政府による1000万ポンドの助成

2012年9月、英国の高等教育担当大臣であるDavid Willettsにより、公的資金による研究成果の公開をOAジャーナルに移行する大学への臨時的な1000万ポンドの助成が発表されました。これはFinch Reportの提言に沿ったものです。この投資により、多くの研究集約的な英国の組織が、APCのコストに見合う資金設置に弾みをつけることが期待されます。

アバディーンでの英国科学フェスティバルで、David Willettsは、公的資金による研究成果をとりまくペイウォール（Webサイトがコンテンツを一部有料化し、アクセスを制限すること）をなくすことは政府の重要な責任であり、真の経済的および社会的利益をもたらすであろうと発言しています。そして、この1000万ポンドの投資が、英国のいくつかの大学がOAモデルへと移行することの助けとなり、学術的発見の新時代到来を告げること、更に英国が革新と発展を促進する研究の最前線で在り続けることにつながるだろうとも述べています。この助成は、研究協議会と英国高等教育財政評議会を通じて資金提供を受けている30の機関に対して行われます。

英国財政審議会は今秋、研究卓越性枠組み（REF）に付託するどんな研究成果も、可能な限り広くアクセスできるようにすべきとの協議にとりかかる予定です。

執筆：谷奈穂（DRF/千葉大学）

参照：「Government invests £10 million to help universities move to open access」

<http://news.bis.gov.uk/Press-Releases/Government-invests-10-million-to-help-universities-move-to-open-access-67fac.aspx>

コラム2：Houghton Report

Finch Report以前に、JISCが委託して公開されたのが、オーストラリアのHoughtonらによる「Economic Implications of Alternative Scholarly Publishing Models」（※1）です。報告は、学術コミュニケーションプロセスを5つに分類し、学術コミュニケーション費用が算定されるモデルを提案しています。イギリスのSwanはこのモデルを使って、イギリスの異なる規模の4大学の学術コミュニケーションコストをシミュレーション（※2）しました。コストの比較は、（1）IRと有料雑誌への投稿を並行して継続する現状モデル、（2）オーバーレイ機能を持つIRによるOA出版に移行するモデル、（3）APCを課すフルOAジャーナルに移行するモデル、の3つで行っています。3つともOAによるコスト圧縮の効果を認めていますが、オーバーレイやAPCに対する著者チャージの水準により、大規模大学で更に付加予算がかかるかと計算しています。2012年にSwanとHoughtonが共著で発表した「Gold for Gold?」（※3）は、このモデルをさらに深化させて、規模別の4大学の比較をしています。結論としては、このHoughton-Swan系統の分析は、グリーン路線と「適正」なAPC価格によるフルOAの優位性を立証しており、ゴールドのみを推奨するFinch Reportとは衝突する内容となっています。

執筆：内島秀樹（DRF/筑波大学）

（※1）<http://www.jisc.ac.uk/publications/reports/2009/economicpublishingmodelsfinalreport.aspx>

（※2）<http://eprints.soton.ac.uk/268584/>

（※3）http://repository.jisc.ac.uk/610/2/Modelling_Gold_Open_Access_for_institutions_-_final_draft3.pdf

次号
予告

【特集1】今年の機関リポジトリ中堅担当者研修は！

【特集2】ICOLC Fall meeting レポート

【特集3】オープンアクセスウィークの取り組み速報

ほか

月刊DRF読者アンケート回答受付中！ http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html

編集後記：10月号いかがだったでしょうか。Finch Reportはぜひ原文にあたることをお勧めいたします。

お便り、アンケートお待ちしております。（kanatani）

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。 gekkandrf@gmail.com

<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/> 月刊DRF第33号 平成24年10月1日発行 デジタルリポジトリ連合

